

レーザーコンパス

科学技術の国際交流について

山 中 千 代 衛*

Chiyoe YAMANAKA*

科学技術は人類共通の財産であり、これが国際的に十分活用され、人類が直面している諸問題の解決に役立つことが強く望まれるのである。

科学にはもともと国境はなく、技術も相互互恵の原則の下、広く交流が行われるべきものである。しかし現実にはこの豊かなべき智慧が軍事応用と結びついて秘匿されたり、制限されたりしている事例が散見される。

資源は有限であり、地球で人類の成長には自ら限界があるというローマクラブの提言にまつまでもなく、人類はもっと連帯して能力をつくり、よりよい明日が期待できるようにしなければならない。

わが国は東洋の一面に位置し、欧米諸国と地理的に隔絶しているため、過去において国際交流ではかなりのハンディキャップを荷ってきた。それにもかかわらず戦後零から出発し、持前の勤勉さと生張面さにより世界の先進諸国に追いつくとともに技術立国の望みを果しつつある。

しかし、わが国の立場は今や曲り角にきており、国内的にも国際的にも従来のパターンで対処することは困難になっている。過去に成功を収めた技術導入政策とは全く別の次元で科学技術の振興に有力な手段として国際交流を認識する必要がある。国際交流の重視は研究への直接的施策を補完するものであって、有効適切に運用すればその成果は計り知れないものがある。

まず第一に外国から学ぶべきことが無くなりつつある現在、海外からの論文、出版物による情報はあまり価値がなく、直接国際的な討論により必要な展開をはかる時代になってきたので

ある。まさに科学技術の第一線において諸外国と互に啓発しあいつつ進歩を求めることになったのだ。この目的のためには積極的に意識してワークショップ形式の会合をしばしば国の内外で開催することなどの施策が必要である。

第二には欧米の科学コミュニティでは常識である外国人研究者の雇用を奨励すべきである。これは海外より第一級の学者、研究者を招聘して教えを請うというような従来のパターンではなく、わが国の研究組織の中に若干の外国人を組込むことである。わが国では欧米と異って、このような場合言語の障壁が立ちほだかる心配があるので受入れ側は十分の対策を用意することが肝要であろう。

第三は国際的共同研究の組織化である。この試みは研究の二重投資をさけることや、広い正面を分担して開拓研究するのに適している。しかしこの方式の採用に当ってはギブ・アンド・テイクの原則が明白に作用することを銘記すべきである。過去30年、やゝもすれば研究の成果のみを導入しようとしたわが国の弊風を清算し、長期的に収支をバランスさせる抜本的な計画を持つことが大切である。模索的な段階から積極的に対応し、自主的な技術の開発を推進し、それを背景にして国際的に相補う有効な協力を行う必要がある。

従来、しばしば国際交流と国際親善とを同義的に理解する趣があったが、国際交流は相互主義の原則にもとづく一種の国際競争と考えられるべきである。またその覚悟なくしてはわが国の地位は国際的に危うしと言うべきである。

*大阪大学レーザー核融合研究センター (〒565 吹田市山田上)

*Institute of Laser Engineering, Osaka University (Yamada-kami, Suita, Osaka, 565)